

# 受容動詞の文法化

## ——ドイツ語における bekommen 受け身と日本語におけるモラウ使役の対照研究——

仁 科 陽 江\*

キーワード: 文法化, bekommen, モラウ, 受け身, 使役

### 要 旨

日本語とドイツ語の両言語において、受容動詞(「もらう」)は、他の動詞の非定形とともに受益の意味を表す。この出発点を同じくする構成原理はそれぞれ異なる方向に文法化し、対照的なカテゴリーを確立する。ドイツ語の受容動詞 bekommen を用いた受益構文が、受益の意味を越えて受け身文へと文法化し、既存する werden 受け身に加わる統語論的なサブカテゴリー、すなわち与格受け身を形成するのに対し、日本語のモラウ構文はあくまで受益の意味を保持しつつ使役文に文法化し、既存する使役構文に加わる意味論的なサブカテゴリー、すなわち受益使役を形成する。両者の違いは、受容動詞によって前面に押し出された「受け手」の意図と役割の違いが、構文解釈において異なる意味的貢献を果たすことによる。尚、これらサブカテゴリーの形成や構文の多義性は共時的な文法化現象を説明するものである。

### 1. はじめに

本稿は授受動詞の一つであるモラウが補助動詞として用いられる際の機能を論考するものである。ここではドイツ語と日本語の事例を対照言語学的に扱うが、授受動詞が特定の構文に作用するメカニズムはこの二言語だけに限られるものではない<sup>1</sup>。両言語間の共通点と相違点は、出発点を同じくする構成原理が異なる方向に文法化し、対照的なカテゴリーを形成する事実を表すものである。

以下の章において、まず授受動詞を概観し、動詞の意味構造と構成要素、及び補助動詞として文法化する条件を論考する。この文法化は構文の多義性と既存の文法カテゴリーに加わるサブカテゴリーの形成という意味で共時的現象としてとらえられるものである<sup>2</sup>。具体的にはドイツ語と

\* NISHINA Yoko: エアフルト大学日本語専任講師。

<sup>1</sup> Newman 1996.

<sup>2</sup> 通時と共時の文法化について Nishina 2000: 139ff.

日本語における bekommen とモラウの文法的機能，すなわち前者が受益文から受け身文へと文法化し既存する受け身構文に加わるサブカテゴリーを形成するのに対し，後者が受益文から使役文に文法化し既存する使役構文に加わるサブカテゴリーを形成するのを記述する．最後に，両者の違いが，授受動詞によって前面に押し出された「受け手」の意図と役割の違いによって決定されるものであること，ドイツ語においては統語論的に(与格受け身)，日本語においては意味論的に(受益使役)，それぞれのサブカテゴリーを形成することを結論する．

## 2. 授受動詞

授受動詞は所有物の移動による所有関係の変化を表し，授受関係を担う構成要素として，与える者，受ける者，受け取られる物という三者を要する．主語になるのが与える者であるか受ける者であるかによって，次のように動詞が異なる(1-a vs. 1-c)．

(1-a) Er gab mir das Buch.

3:SG:NOM:M 与える:PST 1:SG:DAT ART:ACC:N 本

「彼が私に本をくれた。」

(1-b) Ich gab ihm das Buch.

1:SG:NOM 与える:PST 3:SG:DAT:M ART:ACC:N 本

「私が彼に本をあげた。」

(1-c) Ich bekam das Buch (von ihm).

1:SG:NOM もらう:PST ART:ACC:NOM 本 (ABL 3:SG:DAT:M)

「私は(彼から)本をもらった。」

さらに日本語では話者の視点によって授与動詞(「与える」)の語彙を区別する(クレル vs. アゲル)<sup>3</sup>．受容動詞(「もらう」)ではこのような語彙による区別はなく，ドイツ語では与え手は斜格目的語で付加的にしか表現されない．受け手が主語として統語論的階層の高い位置にある時には，与え手は後方に押しやられる(demotion)ようである．それに対して与え手を主語とする授与構文では，主語 > 直接目的語 > 間接目的語という三者が階層順に文法関係を担っている．

授受動詞の補助動詞としての用法を次にみる．

西アフリカや東南アジアの孤立言語の動詞が一般的に二つより多くの名詞句を支配せず，(2)のヨルバ語の例のように動詞連続によって文法関係を確立することは多く報告されている<sup>4</sup>．

<sup>3</sup> ここでは扱わないが話者の視点により敬語表現でさらに区別が可能である(サシアゲル vs. クダサル等)，Kuno 1973.

<sup>4</sup> 例えば Bisang 1992, Lord 1993, Newman 1996 等.

- (2) ó      tà-á      fún      mí  
       he    sell-it    (give)   me  
       “He sold it to/for me.”<sup>5</sup>

なかでも授受動詞に様々な文法化現象が見られるのは、これが受け手という三つめの統語機能を支配する典型的な動詞だからといってよい。日本語においても(2)と同様、授受動詞の構造を基に受益文が作られる<sup>6</sup>。

- (3) 私が彼に本を読んであげた。

ここでは所有物の移動による所有関係の変化という先に見た授受動詞の意味は無い。本を読むという行為に、彼のためにという受益の意味を付け加える機能を持つにすぎない。同様の原理で受容動詞を補助動詞として受益文がつくられる時には、日独両言語で非定形の動詞が組み合わされる。

- (4) Ich                bekam            das                Buch (von ihm)                vorgelesen  
       1:SG:NOM    もらう:PST    ART:ACC:N    本 (ABL 3:SG:M:DAT)    朗読する:PP  
       「私は(彼に)本を読んでもらった。」

ここで(1-c)のように本来の与え手を日本語で奪格にしにくいのは、所有物の移動とそれに伴う時間の推移という意味が欠けていることと無関係では無だろう。加えて、主語の位置にない動作主(agent)として日本語では与格、ドイツ語では奪格をとっていることは、受け身や使役の構文と共通する。受益文が実際にそれらのカテゴリと深く関わっていることを日独対照の形で以下に記述する。

### 3. ドイツ語における bekommen 構文

(1-c) ですで見えた他動詞 bekommen が(4)のように過去分詞とともに述語を作る背景には次のような文型がある。

- (5-a) Ich                bekam            das                Ei    roh.  
       1:SG:NOM    もらう:PST    ART:ACC:N    卵    生の  
       「私は卵を生でいただいた。」
- (5-b) Ich                bekam            das                Ei    gekocht.  
       1:SG:NOM    もらう:PST    ART:ACC:N    卵    ゆでる:PP  
       「私は卵のゆでたのをいただいた。」

<sup>5</sup> Lord 1993: 35.

<sup>6</sup> 授与動詞の受益構文については Shibatani 1996 に詳しい。

他動詞のとり二つの名詞句に加えて, roh は形容詞の叙述用法である (5-a). これが卵の茹でたのであれば, 動詞 kochen 「ゆでる」の過去分詞 gekocht にそのまま替えられる (5-b). 過去分詞の形容詞的な性格がそれを統語論的に可能にするのであって, その際他動詞 bekommen の意味は同じである.

しかし次の例文では動詞の語彙的意味は同じでない.

- (6) Ich bekam den Führerschein entzogen.  
 1:SG:NOM もらう:PST ART:ACC:M 免許証 取り消す:PP  
 「私は運転免許証を取り消された。」

ここでのコンテキストは「得る」のではなく, 反意の「失う」であり, 所有物の移動という点では逆方向に作用する. (4) のような受益の意味も無い. むしろ被害 (malefactive) である. 訳文も示唆しているようにここで形成されているのは受け身文の一種である. 次の三つの態を比較されたい. (7-a) が能動態, (7-b) が werden を用いた受け身, (7-c) が bekommen を用いた受け身である. (7-b) と (7-c) が構造上酷似していることが見て取れよう.

- (7-a) Der Vater schenkte dem Jungen einen Ball.  
 ART:NOM:M 父 贈る:PST ART:DAT:M 少年 ART:ACC:M  
 ボール  
 「父が少年にボールを贈った」
- (7-b) Ein Ball wurde dem Jungen geschenkt.  
 ART:NOM:M ボール AUX ART:DAT:M 少年 贈る:PP  
 「ボールが少年に贈られた。」
- (7-c) Der Junge bekam einen Ball geschenkt.  
 ART:NOM:M 少年 AUX ART:ACC:M ボール 贈る:PP  
 「少年がボールを(贈って)もらった。」

bekommen が本来の語彙的意味を失い, 過去分詞とともに述語になって, 受け身のカテゴリーを確立したということが, 統語論的に次のように記述される.

既存の受け身文は助動詞 werden と過去分詞によって構成され, 直接目的語が主語に転換し, 動作主は斜格目的語に後退する. その際間接目的語はそのままで統語機能はかわらない. 一方, bekommen と過去分詞の受け身は, 能動態で間接目的語であった名詞句が主語に転換している. 動作主が後退するのは werden 受け身と同様であるが, こんどは直接目的語がその統語機能を変えずにいる.

受動態の統語論的原理を変形文法的に定義して, 主語の転換, すなわち能動態での非主語が受動態で主語になることだとすれば, werden 受け身と bekommen 受け身は, 二つの統語機能の

転換において相補分布の関係になる。werden 受け身を対格受け身, bekommen 受け身を与格受け身<sup>7</sup>と呼んでもよい。

以上をまとめると、動詞 bekommen は次のように文法化の現象をたどっている。

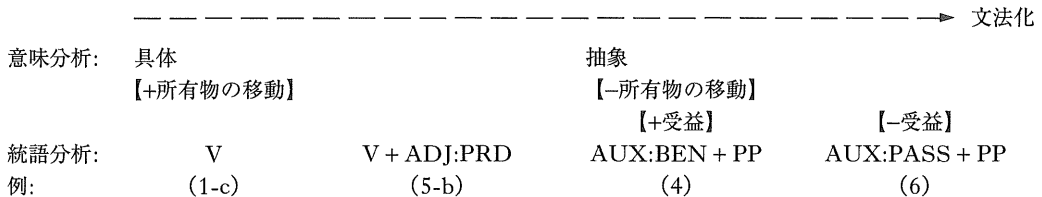


図1 bekommen の文法化

(5-b) と (4) または (6) を区別するふたとおりの統語分析は述語を末位に置く複文構造において次のように見分けることができる<sup>8</sup>。

- (8-a) ... daß wir die Fässer gereinigt von der  
 SR 1:PL ART:ACC:PL 樽 洗淨する:PP ABL ART:DAT:F  
 Fabrik bekommen.

工場 もらう

「私達が樽の工場で洗淨したのをもらうこと」

- (8-b) ... daß wir die Fässer von der Fabrik  
 SR 1:PL ART:ACC:PL 樽 ABL ART:DAT:F 工場  
 gereinigt bekommen.  
 洗淨する:PP AUX

「私達が樽を工場で洗淨してもらうこと」

(8-a) の gereinigt は形容詞補語の叙述用法で動作主とともに名詞の直後に置かれ、本動詞 bekommen のみが述語として末位にあるが、(8-b) では述語の一部として助動詞 bekommen と切り離されることなく末位に位置する。

本稿では扱わないが、(8-b) のような受け身文が、とくに斜格目的語として付加されている動作主を表現しない時、可能の意味に解釈されることがある。日本語のレル, ラレルが受け身ばかりでなく、可能、自発、尊敬の意味を表すのに似ているが、これも文法化の進む過程に伴う多義的様相が共時的に現れていると見られる<sup>9</sup>。

<sup>7</sup> 従来の研究では, bekommen-Passiv (Hentschel/Weydt 1995), Rezipienten-Passiv (Askedal 1999), Dativpassiv (Heine 1993) などと呼ばれている。

<sup>8</sup> Askedal 1999.

<sup>9</sup> 態のカテゴリーの多義的様相については, 柴谷 (1997a), Shibatani 1985 等。

bekommen 受け身を促進する要素として付け加えれば、ドイツ語能動文の与格の持つ多様な意味役割が指摘される。与格をとる間接目的語は次の例のように受益の意味でもあれば (9-a)、奪格の意味でもあり得る (9-b)。それに応じて変形した与格受け身も多様な(つまり受益に限定しない)意味を持つことになる。

- (9-a) Der Vater öffnete der Tochter die  
 ART:NOM:M 父 開ける:PST ART:DAT:F 娘 ART:ACC:F  
 Tür.  
 ドア  
 「父が娘にドアを開けてやった」

- (9-b) Sie entzogen ihm den Führerschein.  
 3:PL 取り消す:PST 3:SG:DAT:M ART:ACC:M 免許証  
 「彼から免許証を剥奪した。」

このように、ドイツ語における文法化の背後には、統語論的に条件付けられた状況がある。これは、以下の章で扱うように、統語論より意味論的事情を条件とする日本語における文法化の場合と大きく区別すべきところである。

#### 4. 日本語におけるモラウ構文

ドイツ語の bekommen と同様モラウはそれ自体何物かを受け取るという意味で直接目的語をとる (1-c)。それが他の動詞と組み合わせられて受益文になるのは (4) で見たとおりである。ドイツ語の構文が形容詞補語の叙述用法に基づいているのに対し、日本語では本来二つの文を結び付けるテの形がとられている。

- (10) 「私は父に本を買ってもらった」

この文を複文構造に還元するとすれば「父が本を買って私は(それを)もらった」となり、テの形の動詞を含む節のできごとは時間的に本動詞のそれに先行して二つの事象が継続する解釈になる。その際の「私」は受け手 (recipient) であり、実際に具体的な所有の移動(ここでは本)がある。ところが (4) のように具体的に受け取るものが無い場合、モラウを本動詞として扱うことはできない。「父が本を朗読して、私は(それを)もらった」とは言えず、「それ」が何であるのか不明である。テイル、テオク、テイクなどテを伴う一連の補助動詞的用法には、継続的複文の意味は無いので、統語理論上両者を区別して扱われることが多いが<sup>10</sup>、もともと二価性の文が一価性の文に縮小されたのだという立場をとれば、従属節の主語の格が主格から与格に後退し、本動詞

<sup>10</sup> 例えば RRG (Role and Reference Grammar) を応用した Hasegawa 1996.

が補助動詞化するところに統語論的縮小現象が見られる<sup>11</sup>。

いずれにせよ、具体から抽象への移行、語彙の意味の喪失という文法化の方向<sup>12</sup>を表していることは明らかである。

ここまでの経過は前章のドイツ語の場合と同じであるが、補助動詞の意味が両言語の間で決定的に異なるのは(6)のような例である。ドイツ語では受益文から出発して、「受け取る」対象が良いものも悪いものも意味するようになる点で、構文が付加する意味は中立化し、受け手を主語の位置に進める(promotion)という文法機能のみに帰着する。一方日本語ではこの構文はあくまで受益の域を出ず、被害の解釈はあり得ない。授与動詞を用いた受益構文では「殺してやる」というふうに、対象が恩恵でもあれば害でもある意味に多様化し得るが、モラウにおいては不可能である。

この点に、受益文を使役文に文法化するメカニズムが隠されていることを以下に述べる。

次の例は筆者が実際に耳にしたある夫婦の会話である。隣人が隣接する庭の垣根を作ったことを報告している。

夫: 「お隣に垣根を作ってもらってから野良猫が入ってこなくなってね…」

妻: 「お隣に作ってもらったんじゃないくて、お隣が作ってくれたのよ。」

夫: 「そう、作ってくれたんで…」

夫がモラウを用いたのは受益の意味であつたろうが、妻はそれを使役の意味と解釈し、訂正した。指図してあるいは頼んで作らせたのだという誤解をさけるためであろう。この違いは、益を受ける側の意図の有る無しによる。クレルもモラウも話者を受け手とする点で共通するが、クレルでは動作主の隣人が主語の位置にあって行為をひき起こし、その行為が他の要素対象に及ぶ。階層の低い位置にある受け手は動作主の意志に対して影響力を持たない。それに対しモラウでは受け手が主語の位置にあって、他の独立に機能する動作主によってもたらされた行為の影響を受ける。後者がそのまま、能動態に対する受動態の構造であるのはドイツ語の例で見たとおりである。受益文になるのは、受ける影響が肯定的で歓迎される場合である。受け手にとって良いものは受け手によって積極的に扱われ、動作主の行為を奨励するようになると、受け手はもはや単なる受け手ではなく、行為をひき起こすのに加担する者、すなわち使役者としての役割を担う。モラウが受益の域を出ないことが使役の意味を作るのは、自分自身に及ぶ意図的な行為ならば好ましいものでなければならないからだ<sup>13</sup>。(他者による意図的な行為を表すクレル文では「よくもやってくれたね」というふうに被害の意味でも用いられる。)ここに至ってモラウの主語は主体性(agentivity)を持つ使役者、動作主は被使役者としてその行為は使役構造の枠に従属するという、

<sup>11</sup> Lehmann 1988.

<sup>12</sup> Heine 1993, Lehmann 1995 等.

<sup>13</sup> 柴谷 (1997b).

使役文法構造が確立する。

以上をまとめると、モラウの文法化は次のようになる。

	-----> 文法化			
意味分析:	具体 【+所有物の移動】		抽象 【-所有物の移動】 【+受益】	【+受益】 【+意図】
統語分析:	V	V + V	AUX:BEN + PP	AUX:CAUS + PP
例:	(1-c)	(10)	(4)	(11-d)

図2 モラウの文法化

受益構文の使役カテゴリーへの文法化によって、日本語の使役表現は次のようにさらに幅を広げる。

(11-a) 「太郎が花子を車からおろす」

(11-b) 「太郎が花子を車からおりさせる」

(11-c) 「太郎が花子に車からおりさせる」

(11-d) 「太郎が花子に車からおりてもらう」

(11-a) は使役動詞による語彙的表現、(11-b) 以下は形態素によるものである。従来の使役構文の研究では使役(作為)動詞と形態素サセルのみを扱うのが常であった。(11-b) が花子の意志に関与せずに使役行為が及ぶのに対し、(11-c) では被使役者の花子の意志を許容する使役とされた<sup>14</sup>。(11-c) の許容使役に並んで(11-d) をいわば受益使役とするならば、この両者の違いは意志の在りか、すなわち花子が車からおりることを望むのは(11-c) では被使役者の花子、(11-d) では使役者の太郎である。(11-a) では主語の目的語におよぼす影響が最も大きく、使役者の行為は直接的に作用する。(11-b) では作用のしかたが間接的になり、(11-c) と(11-d) ではさらに希薄である。

受益使役は確固とした文法範疇を成す使役構文としては文法化の度合いが低いので、純粋な文法機能を担う前段階の特徴として、特定の意味(ここでは使役者の受益)が附随しているのである。

## 5. 受け手の意図と役割

前章で、受益構文の主語である受け手が意図を持って積極性を得るところから使役構文が文法化することを述べた。そこでは好ましいことは意図的にされ易いという意味構造を要因とする。ド

<sup>14</sup> Shibatani 1973.



イツ語の同様に受容動詞を用いた受益構文では受益の意味が中立化し受け手を主語とする受け身文に変形するが、被害を受けることを好んで意図的にするわけではなく、むしろ他者による行為の及ぶ対象としての性格を増す。文法化されたこの受け身文(12-a)を使役の文(12-b)と比較すると、この対照は明らかである。(12-b)では頭を剃った状況が、理髪店などで自ら進んであるいは了解の上で頭を剃らせた状況であるのに対し、(12-a)では、刑務所や強制収容所などで自らの意志に反してあるいは関わりなく頭を剃られたと解釈される。

(12-a) Er            bekam    den            Kopf    rasiert.  
           3:SG:M    AUX     ART:ACC:M    頭       剃る:PP  
           「彼は頭を剃られた。」

(12-b) Er            ließ     den            Kopf    rasieren.  
           3:SG:M    AUX     ART:ACC:M    頭       剃る:INF  
           「彼は頭を剃らせた。」

このように両言語において受け手の役割が変化している。それは、次に示すようにドイツ語の bekommen では命令文が作りにくいことからわかる(13-a)。意図性の低い対象には命令できないからである。モラウの命令文を作るのに支障はなく、それを訳すにはドイツ語では使役構文をとらざるを得ない(13-b)。ただしモラウという動詞は話者の視点を受け手すなわち使役者に置くので、命令する話者が被使役者にはなりえない。その際は通常のサセル使役が適する(13-c)。これも文法化されたサブカテゴリーの意味機能に制限と多義性があることの現れであるのはすでに述べたとおりである。

(13-a) \*Bekomm        den            Kopf    rasiert!  
           もらう:IMP    ART:ACC:M    頭       剃る:PP

(13-b) 頭を剃ってもらいなさい。

独訳:    Laß                            dir            den            Kopf    rasieren!  
           AUX:CAUS:IMP    2.SG.DAT    ART:ACC:M    頭       剃る:INF

(13-c) 頭を剃らせてください。

独訳:    Laß                            mich        dir            den            Kopf    rasieren!  
           AUX:CAUS:IMP    1:SG:ACC    2.SG.DAT    ART:ACC:M    頭       剃る:INF

以上をまとめる意味で、名詞句の意味役割を、actor と undergoer のいわゆるマクロの役割に大きく二分すれば、ミクロの役割としての動作主(agent)と対象(patient)が両極を成し、受け手(recipient)や受益者(beneficiary)は、その中間に位置を占める<sup>15</sup>。それが使役や受け身のカテゴリーに援用される時には、使役の主語はより高い意図性、作用性、支配性をもって actor

<sup>15</sup> Foley & Van Valin 1984.



## 参 考 文 献

- 柴谷方良 (1997a) 「言語の機能と類型」『言語研究』112: 1-32.
- (1997b) 「迷惑受け身の意味論」『日本語文法 体系と方法』, ひつじ書房.
- Askedal, John Ole. 1999. Grammatikalisierung und Persistenz im deutschen “Rezipienten-Passiv” mit *bekommen/kriegen/erhalten*. Paper presented at the University of Erfurt, Germany.
- Bisang, Walter. 1992. *Das Verb im Chinesischen, Hmong, Vietnamesischen, Thai und Khmer*. Tübingen: Gunter Narr.
- Foley, William A., Robert D., and Van Valin, Jr. 1984. *Functional syntax and universal grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hasegawa, Yoko. 1995. *A study of Japanese clause linkage: The connective TE in Japanese*. California: CSLI.
- Heine, Bernd. 1993. Bekommen, ohne etwas zu bekommen: zur Grammatikalisierung des Dativpassivs. In *Sprache und Literatur in Wissenschaft und Unterricht* 24: 26-33.
- Hentschel, Elke and Harald Weydt. 1995. Das leidige *bekommen*-Passiv. In *Deutsch als Fremdsprache. An den Quellen eines Faches. Festschrift für Gerhard Helbig zum 65. Geburtstag*, ed. H. Popp. München: Iudicium.
- Kuno, Susumu. 1973. *The structure of the Japanese language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Lehmann, Christian. 1988. Toward a typology of clause linkage. In *Clause combining in grammar and discourse*, ed. J. Haimann and S. A. Thompson. Amsterdam: Benjamins.
- . 1995. *Thoughts on grammaticalization*. München: Lincom.
- Lord, Carol. 1993. *Historical change in serial verb constructions*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Newman, John. 1996. *Give: A cognitive linguistic study*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Nishina, Yoko. 2000. Grammatikalisierung in Europa und Asien. In *Europa et Asia Polyglotta — Sprachen und Kulturen. Festschrift für Robert Schmitt-Brandt zum 70. Geburtstag*, ed. Y. Nishina. Dettelbach: Röhl.
- Shibatani, Masayoshi, 1973. Semantics of Japanese causativization. *Foundations of Language* 9: 327-73.
- . 1985. Passives and related constructions: A prototype analysis. *Language* 61: 821-48.
- . 1996. Benefactive constructions: A Japanese-Korean perspective. *Japanese/Korean linguistics* 4: 39-74, ed. N. Akatsuka.